

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2023年5月NO.54

SMILES

<https://www.childfund.or.jp>

特集

経済危機を乗り越える!

スリランカの
子どもたちと
家族



ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集

経済危機を乗り越える!

スリランカの 子どもたちと 家族

セイロンティーで知られるインド洋の島国スリランカ。チャイルド・ファンド・ジャパンは2006年より支援を開始し、現在は3地域でスポンサーシップ・プログラムを通じた支援を行っています。そんなスリランカを襲った国家破綻と経済危機。今号では、2023年3月に東京事務所スタッフ藤井(写真右)が視察に訪れた際の様子をお伝えします。



日常に見え隠れする経済危機

3月20日。10時間のフライトを経て到着したスリランカは、最高気温30度前後。街では、客を乗せたバイクタクシー、アジアでよく見かけるトゥクトゥク^{※1}が、クラクションを鳴らしながら勢いよく走り抜けていきます。小さな食堂では人々がカレーを食べ、商店の店先では洗濯ばさみに吊り下げられた宝くじに人が集まります。初めてスリランカを訪れる私は、「これがスリランカの日常なんだな」と、わくわくしながら眺めていました。



ホームから線路を横断して出ていくのもスリランカでは当たり前の日常

しかし、滞在した9日間で見えてきたのは、そんな日常だけではありませんでした。

「そこに売ってるお米。今は1kg490ルピー^{※2}だけど、前は300ルピーだったんだ」と話すスーパーマーケットの店員。「前は教科書が生徒全員に配布されていたけど、いまは半分しか配布されていないの」と話す先生。「偶然だね、僕もこれから日本行きの飛行機に乗るんだ。スリランカの仕事では食べていけないからね」と話す、帰りの空港で出会ったお父さん。

これが、いまスリランカが直面している事態なのです。

※1:三輪のタクシー。スリランカではスリー・ウィーラーと呼ぶことが多い。※2:1ルピーは1.6円ほど。

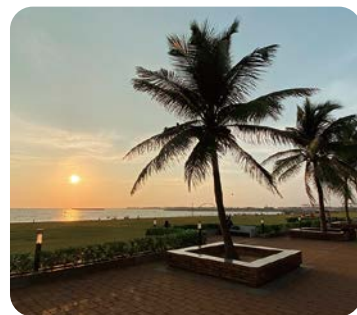


スリランカを襲った未曾有の経済危機

スリランカが異常事態に陥ったのは2022年。新型コロナウイルスのまん延によって観光業が大打撃を受けるなどし、外貨が大幅に不足。対外債務を返済することができなくなり、デフォルト(債務不履行)に陥ってしまいました。外貨不足からガソリンや食料品の輸入も滞り、インフレ率は90%にも。国民の怒りは頂点に達し、大規模なデモが発生。大統領が国外逃亡をする事態にまで発展しました。

私の滞在中に同行してくれたチャイルド・ファンドのスリランカ事務所のスタッフは、「スリランカは危機の

連続だ。2009年までの26年間に及んだ内戦。2020年からの新型コロナウイルスのまん延。そして今の経済危機だ」と、度重なる国の危機について語ってくれました。



夕日美しい海沿いの広場。一時は政府へ抗議する人々で溢れかえっていたという。

「大好きだった卵が食べられない」

こうした経済危機の中、支援地域の子もたちや家族はどうしているのか。訪問したある家族の話やスタッフの話から、その一端が見えてきました。

支援地域の一つモナラーガラに暮らす11歳の女の子カビーシャ。訪問すると、少し照れた表情を見せながらも、近くで採れたフルーツを出してくれたり、なついているノラネコを紹介してくれたり、私を歓迎してくれました。



両親と15歳のお兄ちゃんと暮らすカビーシャの一家。家に水道はなく、近くの水道から水を運んできて、その水を使って、洗濯をしたり体を洗ったりしています。

農業で生計を立てているカビーシャの一家。収穫期には月40,000ルピーほどの収入がありますが、一般

的な家庭で月に最低50,000ルピーほど必要とも言われるスリランカでは、ぎりぎりの収入です。また、収穫期でない時期には農業では食べていけず、副業として日雇いの仕事にも行くといひます。ですが、それでさえも仕事を見つけれないことが多く、月に2日しか働けないときもあるといひます。

そんな家族をさらに窮地に追い込んだのが今回の経済危機。11歳のカビーシャに「『経済危機』ってよく分からないかもしれないけど、何か前と変わったことはある?」と聞くと、「詳しくは分からないけど、ガソリンの値段が上がっちゃったとか、そういうでしょ。私は卵の料理がとても好きだったんだけど、最近是一回も食べてないんだ」と、彼女なりに肌で感じている経済危機の影響を語ってくれました。

カビーシャのお母さんも「お肉やお魚を買う頻度を減らして、なんとかかしのいでいます」と話します。成長期の子もたちにとって、卵、お肉、お魚といったたんぱく質のとれる食材が食べられないことは、極めて憂慮すべき事態です。



チャイルド・ファンドが昨年実施した調査でも、様々な影響が明らかになっています。例えば、80%以上の家庭で食事の量を減らした、85%のユース(青少年)が交通費や授業料の支払いが難しくなり、学校や職業訓練校への出席が不規則になったといった実態が浮き彫りになっています。また、政府統計によれば、冒頭でご紹介したような海外へ出稼ぎに出る人は、2022年に過去最多となり、コロナ前の1.5倍にも急増しています。

交通費や授業料の支払いが難しくなった

85%

食事の量を減らした

80%

地域の人々の力で危機を乗り越える

こうした厳しい環境を乗り越えるためにチャイルド・ファンドは様々な支援に取り組んでいます。その現場にも足を運んでみました。

一つはコミュニティー・キッチン。地域で行っている給食プログラムのような活動です。特に栄養を必要とする、5歳以下の子どもたちと妊産婦が支援を受けることができ、お昼ごはんを食べることができます。

私が訪問したとき、調理を担当していたのは、地域のユース(青少年)の男の子やお父さん。調理当番表もつくられていて、男性、女性問わず、地域の人々が協力し合ってキッチンを運営している様子がうかがえました。

また、コミュニティー・キッチンが行われている建物のすぐわきには、コミュニティー・ガーデンと呼ばれる地域菜園がありました。地域のユースが運営を担い、野菜などを育てています。収穫された野菜は、コミュニティー・キッチンの食材として活用されるだけでなく、一部は販売して収益化し、それを元手に次回の作物の種を購入しています。また、ここでの栽培の経験を生かして、自分の家で家庭菜園をつくったりもしています。



提供された食事を食べさせるお母さん



自宅につくった家庭菜園を案内してくれたユースの女の子

支援の受け手であり担い手であるユース

このように随所で支援活動を支えているユース。一方、「この経済危機で、職業訓練校に行けなくなるなど、ユースにも大きな影響が及んでいる。これまでの努力が経済危機でかき消されてしまい、未来に落胆して自暴自棄になり、違法ドラッグに手を染めてしまう場

合もあり、大きな問題だ。」現地のスタッフからは、こんな懸念も聞かれました。

こうしたユースに対する様々な支援も行っており、その一つが就業支援です。私の見学した縫製教室では、コースを卒業した子どもたち15名が自分のお店をもつことができた、国認定のスキル認定証が発行されて就業につながるなど、支援の成果を知ることができました。

このように、ユースは、就業支援といった支援を「受ける」対象であると同時に、コミュニティー・キッチンやガーデンの運営など、支援の「担い手」としても活躍しているのです。チャイルド・ファンドの支援に支えられながら、ユース、そして地域住民が力を合わせて、この経済危機を乗り越えようとしている。そんな姿を随所で見る事ができた今回の視察でした。



「私も自分のお店をもちたい。」多くの女の子がそう話してくれました

スリランカの人々の力強さを支える

先ほどご紹介したスリランカ事務所のスタッフの言葉「スリランカは危機の連続だ」は、実は、ネガティブな意味での発言ではありません。「スリランカは危機の連続だ。だから、スリランカ人は強い。なんでも乗り越えていける。」彼はそんな風に語ってくれました。

現在の経済危機は、特に貧困地域である支援地域の人々にとって、自分だけの力ではどうにもならない、極めて厳しい状況でしょう。ですが、皆さまが差し伸べてくれる支援があれば、うちに秘めた力強さをもつスリランカの人々は、きっと危機を乗り越えていくことができます。私たちチャイルド・ファンド・ジャパンは、スリランカの人々、子どもたちやユースの力強さを信じて、これからも支え続けていこうと思います。



スリランカ1コマ

こんな

スリランカの文化が垣間見れる写真をご紹介します。



ケンケンパのような遊びも人気



クリケットは男の子に大人気のスポーツ



野生の像が現れることも珍しくない



コーヒーも飲まれますが、やっぱり紅茶が人気

トルコ・シリア大地震 緊急支援

ウクライナ

ロシア

アンカラ

トルコ

震源

ガジアンテブ

アレppo

シリア

2023年2月6日、M7.8の地震がトルコとシリアの国境近くを襲いました。3月時点で、両国で約5万6千人が亡くなり、2,400万人以上が被災したといわれます。ここでは、チャイルド・ファンドの緊急支援について、支援事業部長の石関がご報告いたします。

地震第一報から人道支援開始まで

地震発生の一報が入ったとき、大変な場所で地震が起きてしまったと思いました。シリアでは2011年の「アラブの春」から今日まで内戦が継続し、この大地震前ですら、シリア北西部を中心に1,500万人が国内避難民として人道支援を受け、トルコ側に難民として360万人ほどが逃れていたからです。その状況に追い打ちをかけるような今回の大地震。心が痛みました。

トルコは緊急事態宣言を直ちに発出し、多くの国々が支援物資や緊急援助隊を送りました。一方シリア側は、紛争地域を抱え、シリア政府への制裁(大地震後一部解除)も課されていたため、現地発の情報は限られ、初動も遅れていました。

このような中、チャイルド・ファンドは各メンバー団体で連絡を取り合い、イタリアのメンバー団体WeWorldがシリア北西部アレppo県で2011年の内戦開始当初から国内避難民を支援してきたことから、チャイルド・ファンドとしてWeWorldを中心とした人道支援を開始することとしました。



アレppoの現地の状況とチャイルド・ファンドの人道支援

内戦でシリアのアレppoは多くの建物や生活インフラが被害を受けていました。水道システムも例外ではなく、多くの人々が安全な飲料水にアクセスできない状態が続き、2022年からコレラも流行し始めました。

今回の地震では、さらに多くの人たちが住む場所を失われ、避難所での生活が始まりました。地震で水道システム

の被害が広がり、安全な飲料水へのアクセスはより厳しい状況となりました。アレppoの2月は朝方には気温が0度を下回るときもあり、避難所での生活はかなり厳しいものとなりました。

このような状況に対応するため、私たちの人道支援の初動段階(2~4月)では、避難所で生活する人々に安全な水を配り、冬を少しでも暖かく過ごせるよう毛布やマットレスを提供してきました。

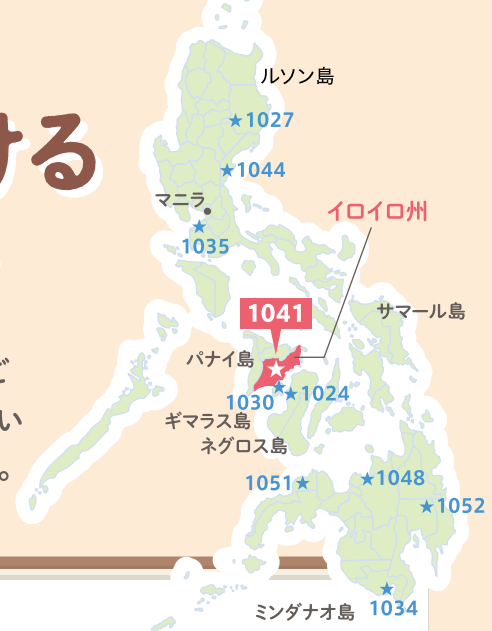
安全な水は、初動段階では給水車で運んでいましたが、中長期的視点に立ち、傷んだ給水システムの修理にも着手しました。出席率はまだ低いのですが、学校での授業も再開されるようになりました。このため、学校で授業を受ける上で必要な物品提供を開始しました。

内戦、そして今回の大地震で厳しい状況に置かれているシリア。支援者の皆さま、引き続きシリアの状況へのご関心、お力添えをいただければ幸いです。





イロイロ州における自立のご報告



フィリピンの支援地域の一つイロイロ州(プログラム1041)は、皆さまのご支援によって、このたび支援から自立することとなりました。これまでの温かいご支援に心より感謝申し上げますとともに、活動の成果をご報告いたします。



イロイロ州では、2013年に活動を開始し、10年間で402名の子どもたちがスポンサーシップ・プログラムの支援を受けました。チャイルドの親たちは農業、建設作業員、市場での小売り、家事労働者など、不定期で収入が低い職業に就いており、家庭で子どもの教育や健康を十分に支えることが困難な状況にありました。スポンサーシップ・プログラムでは、このような状況の中で暮らす子どもたちの健全な成長と家族の生活改善を支援し、地域の自立につながる取り組みを行いました。



子どもの権利と保護について学ぶチャイルド

まず、教育面では、チャイルドが確実に学校に通い続けられるよう、学用品や交通費、学費の支援を行いました。チャイルドは、「勉強を続けることが自分の未来を切り開くことにつながる。スポンサーシップ・プログラムはそのための鍵である」と受け止め、希望をもって勉強に向かっていくことができました。

また、定期健診、医療へのアクセス支援、市販薬やビタミン剤、衛生キットの配布を行い、健康状態の改善・維持にも取り組みました。保健衛生や栄養に関する研修、食糧・栄養確保のための家庭菜園作りも促進しました。こうした活動を通じ、子どもと家族は健康維持に必要な知識やスキルを身につけ、自分たちの健康管理について意識

できるようになりました。家庭菜園は現在、全支援家庭で行われています。

また、チャイルドの内面的な成長や、保護者の子育てに対する意識改善を目指した啓発活動にも積極的に取り組みました。子どもの権利を中心に据えた様々なテーマの研修を通して、子どもたちは自分たちを守るために必要な知識、態度、スキルそして自信を身につけ、また保護者は子どもの権利に基づいた保護の意識をもって子どもに関わることができるようになりました。

さらに、家庭の収入向上や住民主体の組織づくりの支援も行いました。子どもたちが中心となって設立した、メンバー270名のユース組織は、自分たちを取り巻く問題を考え、地域で積極的に活動しています。また、家族や地域住民400名以上で構成された住民組織は、地域住民の生活改善を目的とし、出資金を募り、小規模資金の貸付、ビジネスセミナーへの参加支援、ユース組織の活動支援等を行っています。持続可能な運営体制が整ったこの組織は、2020年、労働雇用省に正式登録されました。2つの団体は地域が支援から自立した後も、子どもの権利や保護の推進、家族・地域の生活改善に貢献する活動を担っていきます。



組織の運営について話し合う家族、地域住民のメンバー

お知らせ

外国にルーツをもつ子どもたちの支援について

チャイルド・ファンド・ジャパンは、アジアの貧困地域で暮らす子どもたちの支援をはじめ、日本国内でのOSEC(子どもへのオンライン性搾取)をなくす取り組みなど、子どもの権利を守る活動を45年以上にわたって続けてきています。こうして活動が長期にわたる中で、社会情勢も変化し、特に事務所の所在地である東京都杉並区では、ネパールをはじめとした外国にルーツをもつ子どもたちが急速に増えています。そして、こうした子どもたちは、言葉の壁、文化の壁によって、学校での学習や友達づくりなどに様々な困難を抱えています。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、これまでのアジアにおける支援の経験、「杉並区民の手でネパールに学校を!」キャンペーンなどを通じたネットワークを生かし、外国に

ルーツをもつ子どもたちの学習支援を開始することとしました。杉並区を拠点に、補習教室「学びのフレンドリースペース」を開催し、学校の授業でついていけなかったところの補習、宿題のサポートなどを行っています。

私たちは、団体のビジョン「すべての子どもに開かれた未来を」、ミッション「生かし生かされる国際協力」をあらためて見つめなおし、そして、団体の歴史や強みを生かしつつ、外国にルーツをもつ子どもたちへの支援を行ってまいります。皆さま、どうぞご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。



詳しくはこちらでもご案内しています

ご報告

ネパールで建設中だった校舎が完成し、次期のプロジェクトもスタートしました!

ネパールで実施している「少数民族などの子どもの未来を開く 子どもにやさしい学校づくりプロジェクト」。ネパールの首都カトマンズから150km離れたゴルカ郡の山岳地帯で、校舎建設と教育の質向上の支援を行っています。

2022年2月から行っていたプロジェクトの第1期は、2023年の3月に無事完了。地震にも強い3階建ての校舎が完成し、子どもたちが安心して学習できる環境が整いました。

プロジェクトでは、「子どもにやさしい学校」というコンセプトのもと、教育の質向上の研修なども実施。特にこのゴルカ郡は、ダリット(ネパールに存在するカースト制度に属さない、不可触民とされる人々)や少数民族が多く暮らす地域で、そうした弱い立場の子どもたちも含めて安心して学べる環境づくりを進めてきました。研修に参加した自治体の職員からは「自分もダリットの出身で、子どものとき先生に差別的な言葉を使われることもあり苦しんだ。この研修は非常に有意義なもので、事業終了後もぜひ自分たち

の自治体で継続したい」といった声も聞かれています。

2023年4月には、プロジェクトの第2期がスタート。同じゴルカ郡で、引き続き校舎建設、教育の質向上に取り組んでいきます。皆さま、これからもご支援をよろしくお願いいたします。



Ch⁺ldFund
Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンはここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

Ch⁺ldFund
Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

チャイルド・ファンド・ジャパンスマイルズだより **SMILES**
特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長/高橋潤 事務局長/武田勝彦
TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
E-mail: inquiry@childfund.or.jp
URL: https://www.childfund.or.jp/

2023年5月発行
(デザイン)
モスデザイン研究所
(印刷)
吉原印刷株式会社